



ハタ(周囲の人)をラク(楽)にする「働(はたら)く」

明日、11月23日は「勤労感謝の日」です。勤労感謝の日は、勤労を尊び、お米などの生産を祝い、国民が互いに感謝し合うという趣旨で、昭和23年に制定されました。

以前は、「新嘗祭」(にいなめさい)と言って、宮中や各地の神社で、その年に採れた新しい穀物を備え、生産の喜びを祝う祭日でした。収穫の喜びと同時に、生産に携わった人々の苦労や努力こそ尊いものであるから、働く人々への感謝と、元気で働けることの喜びを併せて祝う日になりました。

私たちが安心して、不自由なく生活できるのは、社会全体で多くの人が働いて、生活に必要な物を生産してくれているからです。自然災害などの時、全国各地から様々な生活物資が運ばれてきます。そんな時、被災地の人々は、生産に携わった人々の努力の尊さ、必要物資を供給してくれたことに、心からの感謝の念を抱きます。西日本豪雨の災禍に見舞われた我が街、倉敷市も同様の経験を持っています。

では、このような経験がないと、労働の尊さ、感謝の念を肌で感じることはできないのでしょうか。いえ、違うと思います。目を家庭に移してみてください。

家庭の中には、「家事の分担」という立派な「仕事」があります。買い物、風呂掃除、洗濯など数えきれないたくさんの「仕事」があります。各家庭、様々な状況があると思いますが、家事の分担は、ある意味家族の一員としての「義務」と言えます。そこに、お母さんの「ありがとう。」、お父さんの「お風呂気持ちよかったよ。」、子どもたちの「晩御飯おいしかったよ。」の言葉で、自然とお互いに「感謝の気持ち」が湧いてくるのではないのでしょうか。

小学校でも、玄関や廊下、くつ箱の掃除など、学校や学級のためにできることを、自分たちで考え、「奉仕の心」で行動ができている子どもたちがいて、「ありがとう。」の言葉がたくさん生まれています。

明日「勤労感謝の日」には、ハタ(周囲の人)をラク(楽)にするから「働く」という言葉をきっかけに、「家事の分担」や「責任」、「働くことの意義」などについて、家庭で話し合ってみてください。

「労働」ということを身近なこととしてとらえ、まずは、家庭、そして、学校、地域へと目を向け、働くことに「労を惜しまない」素敵な大人に成長してほしいと願っています。 校長 藤井 朗

「勤労」と「奉仕」の心

毎朝の係活動
「くつ箱チェックと
整頓」(2年生)



学校のために(6年生)



学校のリーダーである6年生を中心に「学校のために」働いたり、「学級のために」係活動を熱心に取り組んだりする子どもたちの背中には、「勤労と奉仕の心」を私たちに教えてくれます。

